

●集う場所を求めて ―文学者たちの青春の変遷

①木下杢太郎「パンの会の回想」（『近代風景』昭和2.1）

何でも明治四十二年頃、（…）日本にはカフェエといふものがなく、随つてカフェエ情調などといふものがないが、さういふものを一つ興して見ようぢやないかといふのが話のもとであつた。（…）巴里の美術家や詩人などの生活を空想し、そのまねをして見たかつたのだつた。

・パンの会…北原白秋、吉井勇、高村光太郎、永井荷風など。

明治40年頃より、洋食店（三州屋、永代亭、都川、よか楼、メーゾン鴻之巣）を転々とし、
～42年、カフェ・プランタン開店。

②永井荷風「Au café printemps」（『三田文学』明44.6）

カツフェー、プランタンのばら色の 壁にかけた名画の下 芝居歸りの若き人々の一群が
鉢物の異國の花の香に迷ふ 異國の酒の酔心地 マカロニとモカの烟は立昇る

③門外漢「カフェエと新しき文士」（『新潮』大7.11）

今や、カフェエは新代のエピキュリアンの爲めに、より高尚にしてより洗練された宴樂の席を提供する。
思ふに、後世の文學史家は、カフェエの勃興を以て、新舊の時代を區劃するにちがひない。

・新代のエピキュリアン…菊池寛・久米正雄・芥川龍之介など。

④夢野久作「東京人の墮落時代」（『九州日報』大14.1.22～5.5）

あの大地震は東京市中の到る処に安飲食店をゆすり出した。同時に東京市中にありとあらゆる女のクズをたたき出した。喰い飢えた東京人、女に渴いた東の男は、減多無性に安い食物と安い女を求めた。

→震災前…文学者がカフェで興味を持ったのは、珈琲の味・酒の種類・洋食の有無など食の問題が多く、
店側も客の好みを意識し、より美味な飲食を提供することを競う。

震災後…タイガー（セメント王・浅野総一郎経営）が、食を目玉とするライオンとの差別化として、
カフェに食空間としての充実を求めるよりも、女給を新たな目玉とし、娯楽空間としてカフェの新しい側面を強調。

⑤『騒人』（昭2.10） 「カフェー女給是非」⇒68名中、肯定19・否定22・保留19・無回答8。

肯定…条件付き（美人であれば／下品でなければ等）、全面肯定は4名。

否定…女給より男ボーイを好む。保留…カフェに行かないので判断できない。

→震災前のカフェが、かつての古き良きカフェとして追慕・憧憬の対象となり強調される。

女給へのとまどいが見られ、カフェ空間の
変化に対応できていない一面が見える。

・カフェ年表

明治41		東京、日本橋小網町に「メゾン鴻之巣」開店
明治44	4	東京、京橋日吉町に「カフェ・プランタン」開業。
	8	銀座、尾張町に「カフェ・ライオン」開店。
	3	銀座、宗十郎町に「カフェ・パウリスタ」開店。
大正12	9	1日、関東大震災。
大正13	1	銀座、「カフェ・タイガー」開店。
昭和2	5	銀座、「カフェ・クロネコ」開店。
昭和3		大阪資本カフェの東京進出第1号、「カフェ・ユニオン」開店。
昭和4		大阪資本「サロン春」が東京進出。
昭和5	5	大阪資本「美人座」が東京進出。
	10	大阪資本「日輪」が東京進出。
	12	大阪資本の赤玉食堂、カフェ・クロネコを買い取り「銀座会館」を開店し東京進出。

⑥谷崎潤一郎『痴人の愛』（新潮社、大14.12）

私は当時月給百五十円を貰っている、或る電気会社の技師でした。（…）一人で下宿住居をしていて、（…）先ず模範的なサラリーマン、

→大正末頃には、東京が地方出身者の集合体であり、そうした知らない者同士が共有する空間としてカフェが表現される。

【例・江戸川乱歩「D坂の殺人事件」（『新青年』大正14.1）】※i

※ i ・松山巖『乱歩と東京』（PARCO出版局、昭56）

●集から個へ —大阪カフェの東京進出

- ・ボックス式座席の採用→身体的な距離の接近
- ・効果的な宣伝広告を多様

⑥永井荷風の「つゆのあとさき」（『中央公論』昭6.10）

坪数にしたら三、四十坪ほどもあるかと思われるが、左右の壁際には衝立の裏表に腰掛と卓子とをつけたようなボックスとかいうものが据えて並べてあって、

⑦中村武羅夫「最近カフェ観」（『女性』昭3.5）

東京は宴会趣味、白昼光、開放主義で、奥よりも幅でゆくが、関西では深み、纏まり、小集趣味でゆく。
→カフェ空間は、集う空間から個の空間へ変化。

⑧広津和郎「カフエエ漫談」（『中央公論』昭5.9）

震災前のウーロンの二階をなつかしみ、又その当時のライオンの上品さをなつかしむといった心持の残つてゐる我々は、現代のカフエエを談ずる資格は、ほんたうにはないのかも知れない。
(…)最初東京から輸出し、今や大阪から逆輸入する形になつて、終にカフエエの面影は、全く昔日と違つたものになつてしまつた

☆小説題材としてのカフェ —女給

⑨村島帰之「大阪カフエー弾圧史」（『中央公論』昭和4.4）

客がカフエーへ来るのは、皿を重ねるのが目的ではなく、女性と、そして女性によつて醸し出される雰囲気——カフエー気分に浸るのが目的だからだ。

- ・代表作 広津和郎「女給」（『婦人公論』昭5.8～昭7.2）
永井荷風「つゆのあとさき」（『中央公論』昭6.10）
- ※特徴…小説の舞台、女給のモデルがタイガーであり、作者が広津39歳、永井52歳とカフェへ通う年代より上の年代であること。文学表現としても、当時衰退していた自然主義の技法をとる。

《？》昭和五年以降カフェ文献が多く書かれるのに対して、文学者たちがライオン・タイガーに通つたように大阪系カフェに通う様子が見られない。

- ・カフェ憧憬の反動として、受け入れ不可能。
- ・東京と大阪の対比構造…大阪の文化は軽薄として、東京→1番・大阪→2番とする意識。
- ・文学者の集う場の変化→カフェから料理店・喫茶店へ。（※集会での飲食の重視）

⑩安藤更生『銀座細見』（春陽堂、昭6）

だが、もうオサラバだ。銀座よ、俺は忙しいんだ。(…)僕にとっては懐かしい自由主義的な古い銀座の面影は消えてしまった。蕪雑な、色電気の底抜け騒ぎは、俺にはちょっと似合わない。

以後、カフェは昭和10年代の戦時体制と警視庁の取締を受け、衰微の一途を辿る。文学者も、大阪カフェの衝撃以後、カフェに目を向けることが少なくなっていく。

プランタンを嚆矢として約30年間、文学は変化するカフェに歓迎・反発・当惑しつつ関わり合う。しかし、文学者がカフェを見る場合、その根底には常に「古き良きカフェ」への憧憬があり、この思いが新たなカフェ空間への視線を狭義にしてしまったとも言えよう。

・カフェ関連記事の推移

	酒	茶	カ	女	カ	女
明41	2	1	0	0	0	0
明42	5	3	1	0	0	0
明43	5	4	0	0	0	0
明44	7	4	1	0	0	0
明45	4	4	0	0	0	0
大2	2	7	4	4	2	2
大3	4	5	2	1	1	1
大4	6	9	0	1	0	1
大5	9	10	1	3	0	3
大6	8	16	0	0	0	0
大7	14	11	4	0	1	0
大8	20	18	4	2	4	2
大9	12	8	2	1	2	1
大10	17	14	0	5	0	5
大11	23	21	4	2	1	0
大12	20	18	14	2	3	1
大13	27	26	6	8	2	7
大14	45	33	15	7	2	4
大15	45	30	25	10	2	5
昭2	38	26	29	3	3	1
昭3	35	26	22	4	6	2
昭4	27	21	41	25	10	6
昭5	55	22	32	26	6	12
昭6	28	25	29	28	8	13
昭7	35	22	26	17	6	10
昭8	44	28	12	16	2	7
昭9	30	24	17	12	1	6
昭10	37	18	12	12	2	3
昭11	28	13	11	1	1	0
昭12	28	13	11	1	1	0
昭13	13	13	12	6	1	3
昭14	9	12	2	1	0	0
昭15	16	4	3	1	0	0
昭16	14	14	1	1	0	0
昭17	6	6	2	0	0	0
昭18	1	5	4	0	0	0
昭19	6	2	2	0	0	0

※対象は明治・昭和初期に発刊された文芸誌を中心とした雑誌三六二誌（内、婦人誌二〇誌）
カ：カフェに関するもの。女：女給に関するもの。（点線右部は、内婦人雑誌掲載のカフェ・女給関連記事数）